

A 基礎 童と小鳥

答えと考え方

問1 明示された主語

解答例 童

解説 「童、川のほとりに遊びけり」とある。「川」は遊んだ場所で、主語ではない。

別解・許容 子ども

問2 続いている主語

答え イ

解説 童が鳥を見つけ、そのまま家に連れ帰ったと読む。二つの動作をする人物は変わっていない。

問3 問いかける人物

答え 母

解説 「母」の直後に問いかけの会話が置かれている。次の「童」は、答える方の人物。

問4 話し手と聞き手

解答例 童

解説 問いの後に「童、…と答ふ」とある。会話の内容だけでなく、その前後も確かめる。

別解・許容 子ども

問5 目的語との区別

答え ウ

解説 「母、鳥を籠に入れ」から母の動作が続く。鳥は水を与えられる方である。

A 基礎 童と小鳥 続き

答えと考え方

問6 発言と命令される動作

解答例 話している人物：童／帰るように言われているもの：鳥

解説 「帰れ」と言うのは籠を開けた童だが、山へ帰る動作を求められているのは鳥。話し手と、会話中の動作の主語は同じとは限らない。

別解・許容 子どもが、鳥に帰るように言っている。

問7 主語の切替え

答え 鳥

解説 「言ひければ」の後で、「鳥」と主語が示される。童の発言から、鳥の動作へ移っている。

確認 「鳥」の一字。

問8 根拠を添えた確認

解答例 正しい主語は童で、鳥の後を見送る動作から続いている。

解説 「童、その後を見送りて、家に入りけり」とつながる。②で母が行動していても、③の最後まで母を主語にし続けることはできない。

別解・許容 童が鳥を見送り、その童が家に入った。

本文の現代語訳

- ① ある日、子どもが川のそばで遊んでいた。小さい鳥を見つけ、家へ連れて帰った。
- ② 母が「この鳥はどこにいたの」と尋ねる。子どもは「川のそばにいました」と答える。母は鳥を籠に入れ、水を与えた。
- ③ 夕暮れに、子どもが籠を開けて「山へ帰れ」と言うと、鳥は空高く飛び去った。子どもはその後ろ姿を見送り、家に入った。

B 標準 子に名前を付ける

答えと考え方

問1 状態の主語

解答例 翁

解説 文頭の「翁」が、その時の体調や苦しさを感じている人物である。

別解・許容 竹取の翁

問2 見る人と見られる人

解答例 見る人：翁／見られる人：この子

解説 「この子を」の「を」は、見る対象を示す。文頭の翁が子を見ると、苦しさが治まる。

別解・許容 翁がかぐや姫を見る。

問3 人以外の主語

答え 苦しき事

解説 「苦しき事も止みぬ」は、苦しんでいたことが治まったという意味。翁自身が止まったという文ではない。

確認 「苦しき事」の四字。

問4 前の文から続く人物

解答例 翁

解説 「翁竹をとること久しくなりぬ」に続き、翁が勢いの盛んな者になったことを述べている。

別解・許容 竹取の翁

B 標準 子に名前を付ける 続き

答えと考え方

問5 一文の途中での切替え

解答例 大になりぬれば：この子／秋田を呼びて：翁

解説 大きく成長したのは子。名を付けさせるために秋田を呼ぶのは養育している翁である。
「秋田を」は呼ばれる相手を示す。

別解・許容 かぐや姫／竹取の翁

問6 させる人とする人

解答例 つけさせる人：翁／実際につける人：秋田

解説 翁が秋田を呼んで名付けを任せた。次の「秋田…とつけつ」に、実際に名を付けた人物が明示されている。

別解・許容 竹取の翁／三室戸斎部秋田

問7 近い人名への思い込み

解答例 「秋田を」は呼ばれる相手を示し、秋田は呼ばれた後に子の名を付けるから。

解説 いちばん近い人名をそのまま主語にしない。「を」の役割と、次の「秋田…とつけつ」の順序を合わせて判断する。

別解・許容 秋田は呼ばれる側であり、その秋田が後で名付けを行っているため。

問8 省略を補って読む

解答例 翁は、三室戸斎部秋田を呼んで、この子の名前を付けさせた。

解説 省略された主語の翁と、名の持ち主である子を補う。実際に名を付けるのは秋田で、翁が自分で名付けたとしない。

別解・許容 翁が秋田を呼び、かぐや姫の名を付けさせた。

本文の現代語訳

① 翁は気分が悪く苦しいときも、この子を見ると苦しさが治まった。腹立たしいことも心が和らいだ。

B 標準 子に名前を付ける 続き

訳の続き

- ② 翁が竹を取るようになって長い時がたった。勢いの盛んな者になった。
- ③ この子がとても大きくなったので、翁は名付けのために三室戸斎部秋田を呼び、名前を付けさせた。秋田は「なよ竹のかぐや姫」と名付けた。

C 応用 仁和寺にある法師

答えと考え方

問1 続く動作の主語

解答例 仁和寺にある法師

解説 文頭の法師が参拝を思い立ち、そのまま出かけている。

別解・許容 法師／僧

問2 動作の相手との区別

答え ウ

解説 極楽寺や高良は拝む対象。「を」の前の名を主語にしない。

問3 思い込みの持ち主

答え 法師が、極楽寺や高良などを拝んだ後、参拝する所はこれだけだと思い込んだ。

解説 「拝みて」「心得て」「かへりにけり」は同じ法師の一連の行動。

問4 会話の外と中

答え 法師が、近くの人に言った。

解説 「傍の人に逢ひて」の「に」は会う相手。その相手に法師が参拝の話をしている。

問5 会話内の主語の切替え

答え 法師ではなく、「参りたる人ごと」に当たる、ほかの参拝者たち。

解説 法師は最後に「山までは見ず」と言う。法師の発言の中でも、登った主語は別の人々である。

C 応用 仁和寺にある法師 続き

答えと考え方

問6 感じる人を補う

答え 法師。参拝した人々が山に登る先に、何があるのかを知りたかった。

解説 「何事かありけむ」という疑問を抱き、知りたがったのは話し手の法師。

問7 判断と動作のつながり

答え 法師が、神への参拝こそ目的だと思い、山の上までは見に行かなかった。

解説 「思ひて」と「見ず」は法師の行動としてつながる。山に登った人々を主語にしない。

問8 話し手と筆者を分ける

答え 筆者の考え。②の法師の会話は「とぞいひける」で終わり、③では筆者が経験者の案内の大切さを述べている。

解説 会話内の法師の満足と、会話の外の筆者の教訓を区別する。

本文の現代語訳

① 仁和寺にいたある僧は、年を取るまで石清水八幡宮を参拝することがなかったので、残念に思い、ある時決心して、たった一人で歩いて参拝に出かけた。極楽寺や高良神社などを拝み、これだけだと思い込んで帰ってしまった。

② そして近くの人に会って、「長年思っていたことを果たしました。聞いていた以上に尊くいらっしゃいました。ところで、参拝した人がみな山に登ったのは、何かあったのでしょうか。知りたかったのですが、神に参拝することこそ本来の目的だと思って、山までは見ませんでした」と言った。

③ ちょっとしたことにも、案内してくれる経験者がいてほしいものだ。

D 確認テスト 高名の木登り

確認テスト 100点 採点基準付き

問1 させる人とする人〔10点〕

答え 指図する人：木登りの名人／登る人：指図を受けた人

解説 「人を」は名人が指図する対象。「のぼせて」は登らせるという意味。

採点 指図する名人5点／登るのは別の人5点。

問2 省略された主語〔10点〕

答え 名人の指図で木に登った人

解説 名人は切らせる側で、切る側は木の上にいる人。

採点 名人に指図された木の上の人と分かれば10点。

問3 同じ文中の切替え〔10点〕

答え イ

解説 黙っていたのは名人。降りてきたのは木の上で作業していた人。

採点 イで10点。

問4 命令の主語〔10点〕

答え 話し手：名人／求められた人：木から降りている人

解説 声をかける人と、命じられた動作をする人を分ける。

採点 話し手の名人5点／降りている人5点。

問5 会話の交替〔15点〕

答え 尋ねた人：筆者／答えた人：木登りの名人

解説 語り手が「申し侍りしかば」と問いかけ、その問いに名人が説明を返している。

採点 尋ねた筆者7点／答えた名人8点。

D 確認テスト 高名の木登り 続き

確認テスト 100点 採点基準付き

問6 引用内の異なる主語〔15点〕

答え 怖がるのは木に登った本人で、その人が自分で用心しているため、名人は注意を言わない。

解説 名人の発言の中でも「おそれ」の主語は作業する人、「申さず」の主語は名人。

採点 怖がる作業員5点／言わない名人5点／本人が用心するためという関係5点。

問7 誤った主語の修正〔15点〕

答え 名人自身のことではなく、作業する人は安全だと思う所で油断し、失敗するという説明。

解説 話し手である名人を、会話中のすべての動作の主語にしない。目の前の作業員の例から、人の油断を一般的に述べている。

採点 名人個人の経験としない5点／作業する人を対象にする5点／安全な所で油断して失敗する内容5点。

問8 筆者の評価と対象〔15点〕

答え 筆者が、名人の「安全な所でこそ失敗する」という言葉を、聖人の教えに合うものと評価している。

解説 「下臈」は名人を指すが、評価するのは筆者。身分と教えの価値を分けて読み取る。

採点 評価する筆者5点／名人の言葉5点／安全な所での失敗への戒め5点。

本文の現代語訳

① 名高い木登りの名人と言われた男が、人に指図して高い木に登らせ、枝先を切らせていたとき、とても危なく見えた間は何も言わず、降りる時に軒の高さほどになって、「けがをするな。気を付けて降りろ」と声をかけました。

② 私が「これくらいの高さになれば、飛び降りても降りられるでしょう。どうしてそんなことを言うのですか」と尋ねると、男は「そのことなのです。目がくらみ、枝が危ない間は、本人が怖がっていますから言いません。失敗は安全な所になって、必ず起こすものです」と言う。

③ 身分の低い者ではあるが、その言葉は聖人の教えに合っている。